

理想化された帝国都市？

——ヘルマン・クルツの小説に描かれたロイトリンゲン——

中 島 大 輔

序 帝国都市の終焉

1792年に始まった第1回対仏大同盟戦でナポレオン率いるフランス革命軍に破れたオーストリアは、1797年10月にカンポ・フォルミオの和約を結び、ヴェネチアを得る代わりにネーデルラントと北イタリアを失う。この際オーストリアは、フランスと神聖ローマ帝国との間で結ばれるラスタットの平和条約を前に、秘密条項によりライン左岸の割譲を承認する。新たな国境線は第2回の対仏大同盟戦を経て、1801年のリュネヴィルの和約で確認され、バイエルン、ヴェルテンベルク、バーデン、プロイセンなどはこの地域の領地を失う。こうした事態を受けて1803年2月にレーゲンスブルクで開かれた神聖ローマ帝国議会では、フランスに割譲した領土の補償として、帝国都市を始めとする帝国等族の帝国直属制の廃止と領邦国家への編入(Mediatisierung) および教会領国の廃止

(Säkularisierung) が決定される。これにより1794年に51を数えた¹⁾ 帝国都市は、ブレーメン、ハンブルク、リューベック、フランクフルト、ニュルンベルク、アウクスブルクを除き²⁾、ことごとく独立を失い、数百年におよぶ都市共和国の歴史に幕を閉じた。

経済の衰退や台頭する領邦国家の圧迫に加えて、16世紀後半の宗教戦争から18世紀末の対仏同盟戦に至るまで、度重なる戦乱により疲弊し、多額の負債を抱えていたフランケンやシュヴァーベンの帝国都市には、もはや抵抗する余力はなく、粛々と領邦国家への編入を受け入れた。またこれに伴って進められた市壁・市門などの防御施設の撤去も、市民の大きな抵抗もなく、比較的スムーズに行われた。

その一方で、市壁撤去に象徴的に現れた帝国直属の地位の喪失を嘆く人々が存在したこともまた事実である。たとえばディンケルスビュー

¹⁾ 帝国都市の数については不明のところも多いが、フーゴGustav Wilhelm Hugoの1838年の研究によれば、1250年から1600年まで、記録に残る帝国都市は100以上存在したという。クニプシルトPhilipp Knipschildtの1657年発表の帝国都市に関する浩瀚な著作によれば63が数えられている。ウルムの参事会顧問ゴットヒルフ・ディートリッヒ・ミラーは1794年に51の帝国都市を数えており、これがおよそ10年後の帝国直属の廃止まで最終的な数となる。(Otto Borst, Babel oder Jerusalem? K.Theiss. 1984, S.187)

²⁾ これら独立を維持した帝国都市のドイツにおける意義について、ゲーテは次のようにエッカーマンに語っている。「フランクフルトやブレーメンやハンブルクやリューベックは、大きくて、見事な都市だ。それらがドイツの国富に及ぼす影響は、まったく数え切れないよ。けれども、もしそれらの都市が独自の主権をなくしてしまい、地方都市としてどこかのドイツの大国に併合されていたら、今日の姿はありえただろうか。——私は、当然、疑わしいと思う。」(1828年10月23日。エッカーマン『ゲーテとの対話』(下) 岩波文庫 (1969年) 237頁)

ルの参事会員メツガーMetzgerは次のように日記に記している。

「こうして市の周囲は石切場になり、これによりかろうじて残っていた外面の飾りが失われ、市の財産もいよいよ奪われ、正真正銘の地方都市に変えられてしまった。かつては諸侯にも対抗した昔日の帝国都市の数々は、いまやありとあらゆる屈辱を忍ばねばならないのである。」³⁾

またシュヴェービシュ・グミュントの年代記作家デーブラーDominikus Deblerは次のように慨嘆した。

「11月18日〔1802年〕からこのかた、われわれはかつて持っていたすべての権利自由を失った。われわれはいまや臣民であり奴隷である。多くの皇帝や国王から与えられたわれわれの都市の諸権利にはもはや何の効力もない。」⁴⁾

中世末期の一時期に帝国都市が神聖ローマ国内で一定の政治的・軍事的ファクターたりえた⁵⁾ことは事実であるが、ここには明らかに帝

国末期の小都市の現実から乖離した歴史の理想化あるいは神話化が読み取れる。⁶⁾これを小市民性や懐旧趣味などの一言をもって片付けることはたやすいが、このような理想化がどのような時代的・社会的条件のもとでどのように行われたか、そのあり方をつぶさに考察するならば、中世以来市壁の中で育まれてきた市民性のひとつの側面が見えてくるのではないだろうか。

理想化のあらわれ方はさまざまである。公の歴史記述の形を取る場合もあるだろうし、上記の日記のようなひそかな個人的告白の形もあるだろう。あるいは、たとえばリヒャルト・ヴァーグナーの楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』のような「総合芸術」の形をとる場合もあるだろう。同じ中世のニュルンベルクにドイツの精神活動の源流を認めようとしたヴァッケンローダーらロマン派の作家も思い起こされる。神聖ローマ帝国に関する一連の歴史小説や歴史的著作を著したりカルダ・フーフ（1864—1947）は世紀転換期においてもなお、「実際シュヴァーベンにこそ暮したいものだ。大昔のうるわしいメルヒェンの世界の只中にでもいるかのような古い帝国都市の中に」と述べている。フーフにとって帝国都市は「経済的、政治的、文化的に

³⁾ Franz Prinz zu Sayn-Wittgenstein, Reichsstädte. Patrizisches Leben von Bern bis Lübeck. Prestel. 1965, S.176

⁴⁾ Geschichte der Stadt Schwäbisch Gmünd. K.Theiss. 1984, S.306. ヴュルテンベルクによる近隣の帝国都市の軍事占領は1803年の帝国代表者決議を待たずすでに前年の秋に始まっていた。

⁵⁾ たとえば13世紀後半の皇帝空位時代のライン同盟や14世紀後半のシュヴァーベン都市同盟、あるいは15世紀に入っても1418年から1443年まで続いた「エスリングン盟約」Eßlinger Einung (Eßlingen, Heilbronn, Weil der Stadt, Wimpfen, Reutlingen, Rottweil (一時期のみ)などの都市間のネットワークにより、帝国都市は近隣の領邦や時には皇帝にも対抗した。

⁶⁾ その一方で、たとえば1790年9月末にニュルンベルクを訪れたモーツァルトは「ニュルンベルクで朝食をとったが——みにくい町だ」と一言で片付けている。同年10月に訪ねたフランクフルトについても「自由市ではどんなことが行われているかなんて、みんなほらばっかりだ」と扱き下ろしている。皇帝の戴冠式に際して演奏会を開いて収入を得ようとした目論見が不首尾に終わったという作曲家の苛立ちだけでなく、神聖ローマ帝国末期の帝国都市（ニュルンベルクもフランクフルトもディンケルスビュールやシュヴェービシュ・グミュントより遥かに大きいのであるが）の沈滞も窺える。（『モーツァルトの手紙』（下）岩波文庫（1980年）、174頁および179頁）

帝国の最も重要なファクター」であり、「自由の理念が伝承される中心地」であったのである。⁷⁾

こうした事例のひとつとして、本論では作家ヘルマン・クルツ Hermann Kurz (1813-1873) の小説『帝国都市の鐘職人一家』 Eine reichsstädtische Glockengießerfamilie に描かれた故郷ロイトリンゲンの様相に注目してみたい。考察の先に浮かび上がることが期待されるのは、近隣の領邦国家に編入された後の帝国都市における市民のメンタリティーであり、19世紀のひとりの市民のうちで育まれた歴史意識の深さとそれに基づく帝国都市の文学化・神話化になるう。

I ロイトリンゲンの歴史概観

ヘルマン・クルツの作品に描かれたロイトリンゲンを考察する前に、あらかじめ「後の彼のすべての詩作と創作に根本的色彩を与えることとなった」⁸⁾ この帝国都市のおよその歴史を概観しておこう。⁹⁾

語尾の -ingen が示すようにロイトリンゲンの歴史はアレマン系の集落に遡ると推測される。この集落が最初に文書に登場するのは Rutelingin と記された1090年の記録である。

多くのシュヴァーベン^{シュヴァーベン}の都市同様、都市としてのロイトリンゲンはシュタウフェン朝に起源を持つ。1180年頃皇帝フリードリヒ一世により市場権が与えられ、1220年から40年の間にフリードリヒ二世によりエスリングェンやハイルブロンとほぼ同時期に都市に昇格したと推測されるが、成立の経緯に関しては不明の点も多い。¹⁰⁾ 市は建設当時から王と皇帝に義務を負う王領都市であり帝国都市であったが¹¹⁾、当初は帝国城塞アハルム Reichsburg Achalm の帝国守護 Reichsvogt が市の代官^{シュルトハイス}を任命し、代官職^{シュルトハイス}、酒税、関税、4つの水車小屋など諸々の権利から得られる収入の徴収に当たった。しかしアハルム城の抵当設定(1335年～1360年および1376年から1500年)により、この権利はヴェルテンベルク伯に委譲され、さらにヴェルテンベルク伯からロイトリンゲン市民に対して封土^{レーエン}の形で与えられる。1456年にこの権利は一括して市に貸与され、1500年には皇帝マクシミリアン一世から抵当として市に譲渡される。¹²⁾ これによってはじめてロイトリンゲンは名実ともに帝国直属の自由な都市となる。

しかしロイトリンゲンはすでに13世紀半ばには都市としての実態が整っていたようである。1241年の帝国税帳にこそ記載がないものの、こ

⁷⁾ Otto Borst, Die Reichsstädte. In: R.Rinker und W.Setzer, Die Geschichte Baden-Württembergs. K.Theiss. 1986, S.138-148

⁸⁾ Isolde Kurz, Hermann Kurz. Ein Beitrag zu seiner Lebensgeschichte. G.Müller. 1906, S.14

⁹⁾ 以下の記述は主に次の資料に基づく。E. Keyser, Württembergisches Städtebuch. S.408ff., Dr.J.Forderer, Reutlingen. Leben und Streben einer schwäbischen Reichsstadt. R.Bardtenschlager. 1948., Jürgen Sydow, Städte im deutschen Südwesten. Kohlhammer. 1987. なおJ.Fordererの上記の著作には、第二次大戦直後のいわば「零点」Nullpunktという混乱した社会的状況にあって、精神的な拠り所をかつての帝国都市の文化や歴史に求めようとする著者の懐旧的な姿勢が窺える。これも帝国都市の理想化と言えよう。

¹⁰⁾ 1180年頃皇帝フリードリヒ一世により市場権 Marktrecht が与えられ、国王オットー四世(在位1198-1215)から1209年頃に市としての種々の権利が認められたとする説について、J.Sydowは「アハルム城との密接な結びつきを考えると、当然の疑念が残る」としている。(J.Sydow, a.a.O., S.89)

¹¹⁾ Dr.J.Forderer, a.a.O., S.16f.

¹²⁾ Württembergisches Städtebuch. S.408

の年初めて、アハルム城の帝国守護によって任命されたロイトリンゲンの代^{シュルトハイス}官の記録が現れる。また13世紀の最後の四半期には12名の市民で構成される判事団Richterkollegが存在し、これは1297年に初めて「参事会」Rat (consules)と称するに至った。「市長」magister civiumの記録は1292年に現れるが、その3年後にはツンフト長の記録もある。1297年以降は8名のツンフト長が、1282年から記録に残る12名の都市貴族による参事会に加わっていることから、限定的とはいえエスリングン同様に職人階級がきわめて早くから都市行政に参画していたことが窺える。¹³⁾

市が軍事的にも一定の力を備えていたことは、国王コンラート四世と対立国王ハインリヒ・ラスペとの抗争でも示された。コンラート四世側についたロイトリンゲンは、1247年、フランクフルト近郊で国王を破って意気上がるラスペ勢の攻撃を受けるものの、包囲戦に耐え抜く。陥落を免れた市民は神に感謝し、包囲中の誓願を果たすべく、新たなマリア教会の建設に着手する。1343年に完成したこの教会は今日でも市のシンボルであり、シュヴァーベン¹⁴⁾の盛期ゴシックを代表する教会建築に数えられている。

また1377年5月にはロイトリンゲンの軍勢が市門の外でヴェルテンベルク伯ウルリヒの軍を

激戦の末に破っている。同じ年、皇帝カール四世はシュヴァーベン都市同盟の盟主であるウルムを包囲するものの空しく兵を引いている。¹⁴⁾

1388年のデフィンゲンDöffingenの戦いの敗北も、ロイトリンゲンを含むシュヴァーベン都市同盟にとって決定的な打撃を意味せず、翌年5月のエーガーのラントフリーデ令によりいったんは同盟関係の解散を命じられるものの、シュヴァーベンの19都市は翌1390年に都市同盟を再結成している。¹⁵⁾

しかし、ロイトリンゲンにとって近隣の諸勢力、とりわけヴェルテンベルク伯は常に大きな脅威であった。そこで市は伯との間で1400年から1494年にかけては期限付きの同盟関係、1505年以降はエスリングンなどと同様に庇護条約Schirmverträgeを結ぶことにより、19世紀初頭まで独立を保つ。しかしこの間、1519年にはヴェルテンベルク大公ウルリヒの奇襲を受け降伏し、ウルリヒが帝国追放処分になるまで一時的に独立を失ったこともある。

市政に戻れば、ミニステリアーレン、都市貴族、大商人の主導する政治体制は14世紀に一層市民の権限が拡大される。1343年のいわゆるツンフト闘争を経て成立した政治体制では、ツンフトがツンフト長を自ら選ぶ権利を獲得し、参事会の議席と投票権を得た。¹⁶⁾ 1374年に皇帝カー

¹³⁾ J. Sydow, a.a.O., S.90

¹⁴⁾ ウルムでもロイトリンゲン同様、包囲された時の誓願に基づき、この年から大聖堂の建設が始まる。

¹⁵⁾ シュヴァーベン都市同盟については瀬原義生『ドイツ中世都市の歴史的展開』未来社(1998年)に詳しい。

¹⁶⁾ J.Fordererによれば、この頃市政より追放された都市貴族はロイトリンゲンを離れ、より大きな影響力を行使できるウルムやエスリングンなどの帝国都市に移住したという。(J.Forderer, a.a.O., S.25) しかし市民の間の身分的差異が解消されたわけではない。Herbert Koppの研究によれば、ロイトリンゲンで1250年から1500年まで裁判官や参事会員を勤めたのは„maiores”あるいはdie „ehrbaren Leute”(誉れ高い人々)と呼ばれる85の家柄に限られたという。確かに1374年のツンフト市制により、日雇いも「市民」と、また職人も「誉れ高い人々」と自称することが許されたが、一方でかつての名誉ある家柄はdie „Besten”(最高の人々)あるいはdie „Reichsten und Ehrbarsten der Stadt”(市のもっとも裕福で誉れ高い人々)などと称し、互いに„Herren”(殿方) „Ritter”(騎士殿)などと呼び合った。市の布告でも「高貴な人々」と「高貴でない人々」の区別がなされていたという。(Rudolf Dangel, Freie Reichsstädte anno dazumal. Franckh'sche Verlagshandlung. 1965, S.32ff.)

ル四世の承認を得た新たな選挙制度では、12のツンフトのツンフト長を中心に「小参事会」が構成され、民主的市政はほぼ完成する。

このロイトリンゲンのツンフト市制は、カール五世によって1551年から52年にかけて、他の多くの南ドイツの帝国都市と同様に廃止され、いったんはツンフトを排除した寡頭制（いわゆるハース参事会Hasenrat）が導入される。しかしロイトリンゲンにおいては1576年に皇帝マクシミリアン二世によって再び1374年のツンフト市制の復活が認められ、これが1802年から1803年の帝国直属の廃止、すなわちヴュルテンベルク大公領への編入まで維持されることになる。

市は繊維業や皮革加工業、また鐘鋳造を含む各種の金属加工業を中心に発展する。壮麗なマリア教会が完成した14世紀中頃には市外区を囲み込む新たな市壁が築かれ、中世末期の人口は4500人から5500人を数えた。またこの頃から始められた領地拡張政策の結果、近郊のベッツインゲン、ヴァンヴァイル、オーメンハウゼン、さらに15世紀の中頃からは末にかけてはブロンヴァイラー、シュトカッハ、ゴマリンゲン、ツィーゲルハウゼンを領地に編入した。市の領域は44,2平方キロに及び、領地内の総人口は10,000人を超えた。

さて、このような市の発展に大きな打撃を与えたのが、16世紀以降の度重なる宗教戦争とペストである。1530年にニュルンベルクとともにいち早くプロテスタントに改宗したロイトリンゲンも戦争の災禍を免れなかった。とりわけ17世紀前半の三十年戦争は他の多くの都市同様ロ

イトリンゲンにも大きな損害をもたらし、5000人を超えていた人口は戦後の1649年には3834人に減少する。

さらに1726年9月23日の大火が市の衰退に追い打ちをかけた。火災は三日間続き、市内の五分の四に当たる882戸の家屋が灰燼に帰し、1200世帯が家を失った。マリア教会、市庁舎、病院、ツンフト集会所など30の公的建造物も焼失した。またノイエス・トーア（新市門）、オーバートーア（上手門）、オーベレス・ミュールトーア（上手の水車門）や市壁上の監視塔も失われ、市壁の損壊は五分の三に及んだ。自らの軍隊の維持を怠っていた市は、秩序回復と治安維持のため、ヴュルテンベルク大公に近衛竜騎兵3中隊の派遣を請願せねばならなかったという。

繊維産業の衰退に加えて、18世紀末にはフランス革命軍に対する連合戦争の財政負担が、すでに疲弊していた市の財政を完全に破綻させる。1803年の帝国代表者会議において、帝国都市の帝国直属の廃止と近隣の領邦国家への編入が決定され、ロイトリンゲンもヴュルテンベルク大公国に帰属するが、すでにその前年1802年9月9日にヴュルテンベルク軍が市を占領した際も、市民は抵抗することなく静かに占領を受け入れた。9月14日には市参事会がヴュルテンベルク大公宛に長文の書簡を送り、市を「君主の恩恵と寵愛に」委ねる旨を申し出たという。¹⁷⁾ これをもって多くの南ドイツの帝国都市と同様、ロイトリンゲンの独立と帝国直属性も静かにその終焉を迎えたのである。

同じ状況は他の帝国都市でも見られた。ウルムでは1780年代でもなお都市貴族と一般市民、市参事会員と一般市民のあいだに厳密な相違があり、会合の席順や呼びかけに厳然たる区別があったことをフリードリヒ・ニコライが伝えている。（マックス・フォン・ペーン『ドイツ十八世紀の文化と社会』三修社（1984年）452頁）

¹⁷⁾ Klaus-Peter Schroeder, *Das Alte Reich und seine Städte*. C.H.Beck. 1991, S.352



1726年のロイトリンゲンの大火。上空に「おおロイトリンゲン 汝の罪 汝の火災」
O Reutlingen. Dein Sünd Dein Brandの文字が見える。(Gerda Domes, Die Befestigungsanlagen der
Freien Reichsstadt Reutlingen. Pädagogische Hochschule und Stadt Reutlingen. 1966より転載。)

II クルツ家とロイトリンゲン

残念ながらヘルマン・クルツについては日本ではあまり紹介されていない。管見の及ぶ限り作品の翻訳も研究もほとんど行われていないようである。この背景には活動の範囲も作品の舞台も南ドイツ・シュヴァーベン地域を出ることのなかった作家の特殊性や地域性があるのかもしれない。¹⁸⁾ フリッツ・マルティーニも『ドイツ文学史』の中で、クルツをユスティヌス・ケルナー、グスタフ・シュヴァーブなどとともに「シュヴァーベン派」に分類し、郷土の歴史に取材する歴史ロマンにその本領を認めてい

る。¹⁹⁾ それゆえ、これから考察する『帝国都市の鐘職人一家』が故郷ならびに家族の歴史を題材にしている以上、ここで作家を含むクルツ一族とロイトリンゲンの関わりを、娘イゾルデによる伝記²⁰⁾などを基に手短かに紹介しておく必要があるだろう。

クルツ家の記録は15世紀に遡り、この頃すでに自由農民として独自の世襲地を所有していたと伝えられる。1483年頃にはハンス・クルツ Hans KurtzがオーストリアからキルヒエンテルインスフルトKirchentellinsfurt近郊の土地を封ぜられ、これ以降クルツ一族はロイトリンゲン

¹⁸⁾ イゾルデ・クルツは父ヘルマンの小説集を編むにあたり、作家自身の言葉を用いて「柵の内」Innerhalb Ettersという表題を付し、その文学のひとつの特色を示した。

¹⁹⁾ フリッツ・マルティーニ『ドイツ文学史』三修社（1979年）323頁

²⁰⁾ I. Kurz, 前掲書。その他, H.Kurz, Denk- und Glaubwürdigkeiten. Union Verlag Berlin. 1973の巻末のGerhard Fischerの解説も参照。

の年代記に頻繁に登場する。クルツ家は当初から自由闊達で企業家精神に富む、いくぶん不遜ながら有能な一族であったようである。遍歴や冒険を好む性向も早くから認められる。16世紀にはゼバスチャン・クルツSebasitian Kurtzという者がフッガー家の代理人として皇帝カール五世に随行してイタリアに赴いた。この時の手記は、シュマルカルデン戦争の重要な歴史文献になった。また一族の別系は戦時の功績が認められて皇帝から家紋を拝領したという。

作家の家系の始祖はミヒャエル・クルツMichael Kurtzという鐘鋳造および消火ポンプ製造職人で、17世紀末には大きな工房を構えていたという。製品はスイス全土やドイツの広い地域に供給された。ミヒャエルについては、重い税負担に反対したため14日間塔に投獄されたという記録も残っている。

息子ヨハネスも同様に血気盛んな職人で、スペイン語の罵り言葉を操り、ツンフト長および参事会員の印である縁つきの帽子を常にかぶっていた。外国での修行を終えて郷里のロイトリンゲンに戻ったヨハネスは、その高い技量で父の工房を繁栄へと導く。クルツの一族の物語は、作家の高祖父にあたるこの外国帰りの若き親方ヨハネスと、後見人に財産を奪われ、羊飼いの境遇に身を落とす高祖母マルガレーテのなれそめから始まる。小説では高祖母の名前こそドロテアと変えられているが、それ以外の人物描写や物語上の設定（後見人の裏切りや羊飼いの身分など）はほぼ事実に基づく。ヨハネスは1726年の大火の際、消火活動につとめている間に、長年の友人に財産を奪われる。ヨハネスは名誉心の強い気性の激しい人間であったが、この事件を神の定めた運命として甘受したという。この挿話も『帝国都市の鐘職人一家』

にそのまま採り入れられている。

物語の実質的な主人公となる次の代のフランツ（作家ヘルマンの曾祖父）および『祖父が祖母を娶った話』Wie der Großvater die Großmutter nahmの主人公ヨハネス（作家の祖父）についても、言い伝えや作家自身の記憶に基づいた忠実な性格描写が作品中で行われている。ただし曾祖父母、祖父母のロマンチックな恋物語については「歴史的な縦系にかなり文学的横糸を織り込んだもの」とイゾルデ・クルツは述べている。

作家の祖父ヨハネスは1737年生まれ。参事会員を勤めたこの鐘職人は、帝国都市の終焉とヴェルテンベルク編入を直接経験しており、作家にとっては「古き良き」帝国都市時代の生き証人であった。1824年、87歳で亡くなる数日前に参加した射撃大会では、孫ヘルマンの目の前で見事に的を射抜いたという。

作家の父ゴットリープ・ダーヴィットは1783年に生まれ、1826年に43歳の若さで病死した。知的な人間で、詩人シラーの崇拜者であり、同じロイトリンゲン出身の国民経済学者フリードリヒ・リストの理解者であった。若き日のヘルマンはシラーのバラードを暗誦して父親を喜ばせたこともある。しかし家業を継がず、商人の道を選んだゴットリープは成功に恵まれず、病も得て晩年は鬱々とした日々を送った。そのため息子ヘルマンとはついに理解しあうことがなかった。啓蒙時代の申し子らしく、息子の読み耽る小説を取り上げ、代わりに旅行記の類を与えて読ませた。また理性を信奉し、迷信をことごとく排斥するあまり、昔の民衆本まで目の敵にしたという。

ヘルマンはこの父と、テュービンゲンの書籍印刷業シュラムの娘である母親の間に1813年に

生まれる。故郷のドイツ語およびラテン語学校で学んだ後、1827年ヴュルテンベルク王国の神学生選抜試験に合格し、マウルブロン修道院の寄宿学校に入学。そこでの4年間にドイツ、イギリス、フランスおよびイタリアの文学を系統的に読みふけた。1831年にテュービンゲンの神学校に進み、詩人で作家、文学研究者のルートヴィヒ・ウーラントや民主主義的な神学者のフェルディナント・クリスティアン・バウア、ダーフィット・フリードリヒ・シュトラウス、美学者のフリードリヒ・テオドール・フィッシャーを知る。このテュービンゲン時代に英詩の翻訳や風刺的箴言詩など最初の文学的活動が行われた。1835年に修道院から放校された後は、自費で学び終え、試験に合格。ベープリンゲンで副牧師の職に就く。しかしわずか数ヶ月で自分が聖職に向かないことを悟ったクルツは、1836年シュトゥットガルトに移り、独立した作家としての道を歩む。

さて、これからは小説『帝国都市の鐘職人一家』に添って、作家一族と帝国都市の関係を見て行くことにしよう。

Ⅲ 小説『帝国都市の鐘職人一家』

文学と歴史資料のあいだ

1. 成立

ヘルマン・クルツの代表作の一つ『帝国都市の鐘職人一家』は、1858年出版の『小説集』Erzählungenの第1巻に収められている。すでに1836年にクルツは、後に小説の一部を成す『アッテンドルンの鐘』Die Glocke von

Attendorn²¹⁾ および『背教者』Der Apostatをコッタの『モルゲンブラット』誌Morgenblattに発表しており、1850年代にこの両作品をもとにひとつの小説を書き上げた。²²⁾ この作品は同じく1836年に書かれた『祖父が祖母を娶った話』と合わせ、クルツの「家族小説」の主要作を成している。

2. 梗概

およその梗概を述べておこう。「これから始まる物語の語り手は最初期の記憶とともにかつての帝国に生きている」との言葉で登場する語り手は、自らの記憶に拠りながらロイトリンゲンの歴史と一族の関わりを編年体で語る。帝国都市の始まりから、シュタウファー家との関係、マリア教会の建設、隣邦ヴュルテンベルクとの抗争、宗教改革の導入、さらには三十年戦争の惨禍と1726年の市の大火。そしてこの最後の二つの災厄が語り手の祖父の断食という習慣によって家族の記憶に刻まれたことを述べながら、帝国都市の年代記は鐘鑄造職人一族の年代記に移行する。大火の際に財産を失った若き日の高祖父と高祖母のロマンスが紹介された後、年代記は曾祖父フランツを主人公とする物語に推移する。

青年となった鐘職人フランツは父の工房を離れ、ケルン領のアッテンドルンで父親の友人にあたるヴォルトマン親方のもとで働く。暖かい歓迎を受けたフランツは鐘職人として修行を積みながら、次第に親方の娘カタリーナに魅かれてゆく。ある日結婚の承諾を求めたフランツに

²¹⁾ この伝説はグリム兄弟の『ドイツ伝説集』Deutsche Sagenにも収められている（第127話『アッテンドルンの鐘の鑄造』Der Glockenguß zu Attendorn）。なお、グリム版では、後に落雷で教会の塔が炎上し、溶けた鐘から金が見つかったこと、またその金で塔の再建費用が賄われ、鉛の屋根で葺かれたことも伝えられており、挿入された物語のレベルのみならず、この小説全体の筋立てにも影響を与えている。

²²⁾ Gerhard Fischerの解説による。（G.Fischer, a.a.O., S.378）

対し、親方はカタリーナが実の娘ではなく、孤児として引き取られたことを明かし、カトリックとプロテスタントという所属宗派の違いを理由に二人の結婚を思いとどませようとする。話し合いが決裂に終わるかに見えたその時、雷鳴がとどろき、教会の塔は落雷、炎上する。さらに火の手は市街を襲い、ヴォルトマン親方の家にも迫る。フランツは危機一髪カタリーナを救うが、彼女は燃え上がる教会の塔を見て、3歳の時に経験した火災の記憶を取り戻す。カタリーナは1726年のロイトリンゲンの大火で行方不明となった、市長の娘だったのだ。フランツと親方は教会の鐘を再建した後、カタリーナを連れてロイトリンゲンに帰郷し、驚く両親と市長夫妻の前でカタリーナを紹介する。物語は二人の結婚の場面で大団円を迎え、語り手が再度登場し、若き二人すなわち今は亡き曾祖父と曾祖母の安息を祈って結ばれる。

3. 構成

物語全体は内容的には二部に分けられよう。語り手が自らの紹介に始まり、ロイトリンゲンの歴史とこの都市共和国に対する一家の関係を年代記的に語り聞かせるのが前半部とすれば、1726年の大火に始まる高祖父母および曾祖父母のロマンスは後半部と考えられる。この物語は結末の語り手の再登場によって閉じられるので、物語技法上は一種の枠物語に近い三部構成をとっていると考えられる。さらに後半部のロマンスには三つないし四つの挿話が嵌め込まれ、全体としては二重の入れ子構造となっている。

全篇を貫くのは「鐘」のテーマであり、内容や構成の面では鐘の鑄造に人間の一生を重ねて歌ったシラーのバラード『鐘の歌』Das Lied von der Glockeを思わせる部分もある。物語中

に挿入された「アッテンドルンの鐘」の伝説も作品全体の核として全篇の通奏低音となっている。これに加えて、鐘の音が警告し、追い払うべき「火災」と「嵐」、および宗教改革あるいは異宗派間結婚の問題がライトモチーフとなっており、前半部の年代記と後半部の物語をつなぐと同時に、二重の枠物語のそれぞれのレベルの間に強い連関を与え、小説全体の統一が図られている。

4. 小説で描かれたロイトリンゲンの資料的価値

このような構成にあって、ロイトリンゲンの描写はもっぱら前半部に集中し、語り手によって編年体で行われる。それではどの程度この描写を歴史資料として利用することができるのであろうか。

一般に歴史的証言として文学作品を扱う場合、その資料的価値にはおのずと一定の留保が付こう。小説の描写や叙述をそのまま作者の見解とすることは慎まねばならない。とりわけ物語に語り手が登場する場合、その視点や叙述態度には最大限の注意を払う必要がある。

しかし、この小説においては次の二つの理由から語り手と作者を相当程度重ね合わせ、これを19世紀の一市民の証言として読むことが許されるであろう。

- ・語り手および語り手の先祖の設定が作者の一家の歴史的事実とほぼ一致すること（これについては後に詳述する）
- ・編年体の年代記は後半部の物語と技法・内容の両面で明らかに異なること

第二の点について説明を補うならば、後半部ではまず語り手の後退が認められる。登場人物の紹介方法に注目すれば、年代記のみの登場に限られる祖父は常に「私たちの祖父」と呼ばれ

る一方、「私たちの高祖母」は年代記から物語への移行につれて「ドロテア」に代わる。後半部の主人公となる「私たちの曾祖父」も同様にほどなく「フランツ」と呼ばれる。つまり語り手のいない三人称小説が始まるのである。²³⁾ もちろん継ぎ目を読者に意識させぬよう、この移行は徐々に行われている。たとえば物語に移行した後も「それは広く世界を遍歴して戻ってきた私の高祖父であった」(S.74)などと挿み、年代記と物語をつないでいる。次の箇所は年代記口調の語り手が最後に顔を覗かせた箇所であろう。

「私の高祖父はきわめて厳格で気性が激しく、家庭内の規律に厳しく、自らの地位と威厳を大事にしていた。彼は先の選挙以来参事会に名を連ねていた。参事会員は毎年新たに選挙で選ばれることになっていたが、通常は終身に等しく、杖と剣の携帯が許されていた。高祖父もこれを身に付けずに外出したためしはなく、誰もが自分に対し相応しい敬意を払うか否かを、ある種の嫉妬心をもって常に見張っていた。」(S.77)

以後は完全な三人称形式が貫かれ、もはや語り手の存在や主人公と語り手の関係は読者の念頭から消える。語り手が再び登場するのは、二人の若き主人公の結婚の描写で締めくくられる結末部である。

「しかし私がたった一つの決まり文句を口にすれば、二人の若々しい頭の上にあの魔法の灰をまくことになり、彼ら自身も灰と散るの

である。その魔法の言葉とは『これは私の曾祖父と曾祖母の話であった』。彼らの魂が安らかに憩わんことを！」(S.137)

もう一つの特徴は、設定や展開における後半部の物語的性格である。およそ次の2点に要約されよう。

1) 枠物語の挿入：

- ・アッテンドルンの鐘の伝説（親方の語る物語）
- ・フランツの夢（鐘職人として身を立て、身元の判明したカタリーナと結ばれるという結末の予示）
- ・背教者の悲惨な末路（親方の語る物語）

2) 童話的展開：

- ・アッテンドルンの教会の火災でカタリーナの幼時の記憶が甦える
- ・ともに幼い頃に遊んだ犬の名前「プファウザー」を思い出すことによりカタリーナとフランツの互いの関係が判明する（ティークの『金髪のエックベルト』の同様のモチーフを連想させる）
- ・カタリーナの幻覚（救いに来たフランツを教会の金の天使と見紛う）
- ・負傷したフランツがカタリーナのキスで意識を取り戻す
- ・ハッピーエンド（カタリーナと両親の再会、フランツとカタリーナの結婚、フランツの父とヴォルトマン親方の再会など）

先述のように、この小説の基になったのは1830年代に発表された『アッテンドルンの鐘』と『背教者』という二つの小品であったというが、年代記的な前半部は1850年代にこれらを現

²³⁾ 前半部の資料的価値についてはイゾルデ・クルツの証言もある。イゾルデは年代記の高祖父についての記述がすべて事実に基づくと指摘している。(I. Kurz, a.a.O., S.18)

在の形にまとめる際に加筆された部分ではなかろうか。²⁴⁾ とすれば、これから考察するロイトリンゲンの描写については、1848年の三月革命を経て、自由主義的雑誌の編集長を務めるなど、社会的・政治的意識が高まった後の作家の視点による描写と考えて良いであろう。

5. 年代記に描かれたロイトリンゲン

帝国都市の理想化？

さて前置きが長くなった。それではこの作品に描かれた帝国都市ロイトリンゲンに注目することにしよう。小説の冒頭は次のように始まる。

「これから始まる物語の語り手は最初期の記憶とともにかつての帝国に生きている。しかし彼の父祖の都市は、彼がこの世に生を受けたとき、すでに帝国の瓦解を見ており、さらにそれ以前に神聖ローマ帝国の自由都市としての存在を終えていた。かつては市の紋章に誇らしげなS.P.Q.R.²⁵⁾との文字を掲げていたこの帝国都市は—〔古代ローマ帝国と〕同一の頭文字で正当化されるとはいえ、隣接する強大な侯爵に数百年来庇護税を納め続けてきた小自治体にしてはいささか高慢というべきであろう—、すでにこのかた10年来、大公領、選帝侯領、国王領と遷り代わったこの隣邦の旗色を受け入れているのである。しかし人々の心はこの色にいまだほとんど染まっておら

ず、他のシュヴァーベン帝国都市のごとく、市長が選帝侯の上級官吏に市の権限を委譲する際に悲嘆のあまり地面に倒れて亡くなるという事件こそ起きなかったものの、私たちの町には帝国都市の精神がその良いところも悪いところもそのままに生き永らえていたのであった。したがって『他所の』官吏は住まいさがしに苦勞することがしばしばで、官吏同士たがいに助け合って生活するすべを学ばねばならなかった。それは市民が閉鎖的な仲間関係に閉じこもって、余所者に対してそっけない態度をとったためである。実際、現在と過去の分裂は実に奇妙な現れ方をした。たとえば雹や霜にやられて黒と赤の斑になった葡萄畑のことを、自らの最近の帰属になぞらえて嘲ることもあった。つまり『ヴェルテンベルク』と呼んだのである。」(S.54f.)²⁶⁾

自らを三人称で紹介する「語り手」は語られる世界から客観的な距離を置いており、自らが帝国都市時代を経験していないことを読者に隠そうとしない。枠小説の語り手をそのまま作者と見なすことは多くの場合慎重でなくてはならないが、この小説に限っては冒頭部の時代説明からも1813年生まれの作者と同一視しても良からう。誇り高い市の紋章の文字についても、1505年以降ヴェルテンベルク大公と庇護条約を結んだこと、したがって厳密には完全に独立し

²⁴⁾ 残念ながら『アッテンドルンの鐘』も『背教者』も筆者は未読であり、この点は推測するしかない。(1900年代初頭出版されたHermann Fischer編の12巻の全集(Sämtliche Werke. Max Hesse's Verlag)にも収められていない。) 因みに同じく1837年に発表された『祖父が祖母を娶った話』(1858年に若干の加筆)も物語性が強い。

²⁵⁾ Senatus Populusque Reutlingensisの略で、ロイトリンゲンの参事会および市民を意味する。古代ローマ帝国の正式な名称Senatus Populusque Romanusに因む。ちなみにシュトゥットガルト近郊の帝国都市ヴァイル・デア・シュタットWeil der Stadtも紋章にS.P.Q.R.の文字を掲げている。こちらは「ローマ」のRを「神聖ローマ帝国」と読み換えるべきか？

²⁶⁾ 引用はH.Kurz, Aus einer alten Reichsstadt. R.Wunderlich. 1963により、以下頁数のみ括弧内に記す。

た共和国たりえなかったことを仄めかしながら、自らを古代ローマ帝国になぞらえようという小さな共同体を揶揄している。またヴェルテンベルク（1803年には選帝侯に、1806年には国王に昇格した）への編入もさしたる抵抗なく粛々と進んだことも客観的に述べている。²⁷⁾ 生き永らえた帝国都市の精神についても「良いところも悪いところも」と断り、ここで挙げられた閉鎖的な市民の例のように、必ずしも美化する立場をとっていない。

語り手はこれに続けて、そのような市民のメンタリティーが子どもに直接の影響を及ぼしたことを述べる。

「大人の歌にならって子どももさえずる。私たち子どもにとって何よりの喜びは、どこか忘れられたような片隅に昔の市の紋章を見つけたときだった。これは帝国代表者決議が行われる前の『臨時的』領有の際、すぐさま最初の破壊の波を受け、撤去の憂き目にあったものである。しかし帝国直属の地位を喪失した帝国市民のふところで育った若者は、市の紋章を破壊した大公の役人の勤勉さに勝るとも劣らぬ情熱をもって、かつての栄えある時代の遺品をふたたび捜し出したのである。特に幸運に恵まれていたため、私たちが羨んだのは仲間から『でぶ』と呼ばれていた同級生

で、鈍重ながらとても粘り強い性質の持ち主で、じっと貫き通すような確かな鋭い眼差しで、他の者なら見過ごしてしまうようなものでも見つけてしまうのだった。彼は迫害の目を逃れた帝国都市の鷲の紋章を一日に二つも発見した。いずれも教会の中だった。一つは双頭の鷲で、身廊の丸天井に残っていた。もう一つは古い時代の簡素な形のもので、洗礼堂の丸天井の要に掛かっていた。私たちはこれを神聖な宝物のように守り、互いに目で教え合うだけにして、一言もこの存在を漏らさぬよう気をつけた。もっとも罪のないシンボルに対する仮借ない掃討作戦はとうに終結していたため、そんな用心は不要であったろうが。」(S.55f.)

帝国直属の廃止ならびに領邦国家への編入を象徴的に示す紋章の掛け替えは、1803年2月の帝国代表者会議の正式決定を待たず、前年のヴェルテンベルクによる軍事的占領の際にどの帝国都市でもひとしく行われたようである。²⁸⁾ この文化史的にも興味深いエピソードはそのまま作者の子供時代の体験と考えると良いであろう。

語り手すなわち作者の眼差しは、こうした少年時代の帝国都市時代への熱狂の本質を冷静に分析する。

²⁷⁾ 「市長が市の権限を委譲する際に悲嘆のあまり地面に倒れて亡くなった」という帝国都市の逸話については不明である。前記Klaus-Peter Schroederによる帝国都市の領邦国家編入に関する研究書にもこのようなエピソードは紹介されていない。せいぜいのところ、シュヴェービシュ・ハルの最後の市長（Stättmeister）ヨーハン・エルンスト・グロックが、新たな領主となるヴェルテンベルク公への忠誠式典に参加するのを拒んだという事例くらいである。（K.-P. Schroeder, a.a.O., S.370）シュヴァーベン以外では、ヴィルヘルム・フォン・オラーニエン-ナッサウ侯領に編入されたドルトムントで、権力委譲の式典の際に市民がすすり泣いたと伝えられている。（同市の歴史を紹介した次のホームページを参照。 <http://www.dortmunder-stadtchronik.de/reichend.htm>）

²⁸⁾ Schwäbisch Gmündについても前年に容赦なく紋章の掛け替えが行われたことが伝えられている。（Geschichte der Stadt Schwäbisch Gmünd. K.Theiss. 1984, S.308）

「過去と現在の隔たりは消滅し始めた。官吏の家庭の中には市民の一家、とりわけよそから妻を迎えた家庭と交際し始めるところが現れた。また、それ以上に重要なのは、抵抗してきた人々も、ちっぽけな国家が大きな国家に融合されたことに慣れてきたことであった。

しかし私たちは、自らは帝国直属時代の最後の日々を経験しなかったにもかかわらず、あるいはまさにそれゆえ、帝国直属の地位を失った市民の感覚に好んで浸っていた。この帝国都市に対する幻^{ロマンティック}想は家族の精神によって育まれた。これは旧時代の幾人かの生き残りの姿を通して『古き良き時代』全体をわれわれに示したのだ。あの時代の良い面はほとんど家族に由来するものであった。ここまでは認識していなかったものの、私たちは昔の家族の慣習には良い面があることや、昔の先祖は敬うべき人々であることを承知しており、こうした個々の具体的な事例から過去全体を美化して思い描いていたのである。」(S.56)

ここには一切の過去の理想化を拒否する冷徹な歴史的・社会的観察眼が窺えよう。語り手は帝国都市時代への熱狂を、その時代を直接経験しないがゆえの「幻想」と断じた上で、「古き良き時代」への郷愁が家族の思い出と分かちがたく結びついた性質のものであると分析し、次のように率直に告白する。

「どうして私の祖父が暮した時代の尊さに疑いをはさむことができたでしょうか。1820年代初頭に80歳を越していた祖父は、皇帝カール六世の治下に生まれたのだ！祖父を見た人は『子ども』に愛のみを説いた聖ヨハネもかくありしかとよく言ったものだった。祖父は実

際ヨハネスと言い、子どものように愛情深い人だった。銀白色の長い髪の老人で、その赤ら顔には優しさが溢れていた。祖父の人と成りにはどこにも悪意や偽りが感じられなかった。その年老いた鐘鋳造親方の加わった帝国都市参事会の長所が、どうしてこの私に疑わしく思えたのだろうか！」(S.56f.)

この箇所にも語り手を作者と同一視できる根拠が見出される。作者の祖父ヨハネスは実際にカール六世（在位1711年～1740年）治下の1737年に生まれ、1824年に87歳で亡くなっている。帝国都市時代には鐘鋳造職人として参事会員をつとめたことも事実である。イゾルデ・クルツも、この箇所の祖父の描写が伝承や作者の記憶に沿ったものであると指摘している。

しかし語り手は帝国都市に対する自らの評価に留保をつけながらも、理想化とは別のレベルであらためてロイトリンゲンのツunft市制の民主的性格を称賛する。

「私たちの市の民主主義ほど純粋な民主主義も帝国に存在しなかったであろう。毎年決まった日に市とツunftのあらゆる統治は消滅し、少なくとも市制の規則による限り、まったく自由な選挙によって新たに統治者が選ばれたのである。門閥貴族は中世以降もはや市にはいなかった。市民権はツunft加盟義務と結びついており、最高の高位頭官と言えども、他の市民同様職人であったり、少なくとも職人の家柄であったのである。」(S.57)

ここで言う「民主主義」が現在の概念と異なることは言うまでもない。1551年から52年にかけて皇帝カール五世によって南ドイツの帝国都

市に強権的に導入された「ハース参事会」は、ツンフトの市政への影響力を排除すべく、寡頭制を基本とし、職によっては終身制とされた。しかしながら、第一章で述べたようにロイトリンゲンにおいては1576年にユーバーリンゲン、ブーフホルン、プフレンドルフとともに1374年のツンフト市制の復活が大筋で認められ、ツンフトの政治参加が回復する。K-P.シュレーダーはカール五世によって44名に減らされた大参事会が1576年に再び184名に回復したことを述べた上で、この大参事会が他の帝国都市とは対照的に、市会計係Stadtrechner（1744年まで）や酒税徴収官Umgelterの任命、あるいは新たな法律・条令の可決にあたって、一定の機能を果たしたことを指摘している。²⁹⁾ こうした事情を踏まえるならば、語り手の民主主義礼賛もあながち的外れとは言えないであろう。

「しかし現役時代に祖父が作った市の古い消火ポンプの一台に祖父の名前を読むたびに、私はとても誇らしい気持ちになった。それは祖父と一緒に通りを歩きながら、『参事会員さん』と挨拶された祖父が感謝の気持ちを表しながら控え目に三角形の帽子をつまむのを見たときの誇らしさに劣らなかった。鐘に彫られた祖父の名前は読むことができなかった。あまりにも掛かっている場所が高すぎて、幾度近くまで昇っても読めなかった。幾度と言うのは、私たちは日曜日にオルガン脇の子供席から塔の中にこっそり昇り、耳を聳せんばかりの鐘の音を聴くのがいつもの気晴らしの

ひとつだったからだ。」(S.57-58)

帝国時代の末期まで続いたツンフト市制がいに子供の心に強い印象を与えたかが窺える。職人としての仕事と参事会員の仕事。いずれに対しても幼い頃の語り手は誇らしい眼差しを向けている。

「だが高貴な家門への誇りに似ていなくもない感情を私たちの心の中に呼び起こしたのは、古い帝国都市そのものの歴史であった。この歴史を私たちは紙の上で学んだのではない。口から口へと伝えられてきたのであった。そしてごく自然な関係を通して、それは学校で読むギリシャ・ローマの歴史の偉大ながらも死せる図像とともに、生き生きとした心の歴史となった。その小さな領域は、中規模の都市に帝国史に名を刻むことを許した時代を私たちの目の前に繰り広げるにより、途方もなく拡大したのである。伝えられた伝説や物語を通して、私たちはまず、昔のわが村に市壁と都市権を授与したホーエンシュタウフェン朝を知ることとなった。また大聖堂にも比肩する美しいマリア教会は、生まれたばかりの都市がシュヴァーベン皇帝家に感謝のこもった忠誠を示した時代を、現実のものとして等身大で語ってくれた。変名でもすぐにそれと分かる二人のシュヴァーベンの伯爵が離反し、コンラート王の敗北で終わったフランクフルト近郊での不運な戦いの後、市民は包囲戦の困窮の最中にこの教会の建立を誓約し、

²⁹⁾ K.-P. Schroeder, a.a.O., S.352。O.Borstはロイトリンゲンのツンフト市制に「完全な民主主義的秩序」を認めようとするGerhard Fischerの主張に反論を加えながらも、「強いツンフト的色彩を帯びた政治的鋭敏さと活発さが存在し、これは当時のフランケンの帝国都市ではニュルンベルク以外に認められない」と一定の評価を与えている。(O.Borst, Babel oder Jerusalem? Sechs Kapitel Stadtgeschichte. K.Theiss. 1984, S.345f.)

包囲軍を打ち破るとただちに建築に取りかかったのであった。先祖を激昂させたこの『坊主王』ハインリヒ・ラスペは、私たちの血を沸き立たせる最初の人物であった。私たちは彼を鉄のような強い人物と思い描き、わが市の名誉のためにも、取るに足らない敵と見なさぬよう自戒したにもかかわらず、悪魔のように憎み嫌った。」(S.58 - 59)

ここには19世紀の市民のあいだで帝国都市の歴史意識がどのように育まれてきたかについて、貴重な証言がある。まるで世襲財産のように家族の間で代々口から口へと伝えられてきた帝国都市の歴史は、それを語る祖父の姿や都市に残る歴史的記念碑とともに、幼少時代の作家の心に深い印象を残したのである。こうした伝承においてはフリードリヒ一世による1180年の市場権の付与が都市の始まりとされていたのであろう。シュタウファー家に対する感謝と忠誠はなおも生きている。1246年のフランクフルト近郊での国王コンラート四世と対抗王ハインリヒ・ラスペの戦いの際、ヴェルテンベルク伯ウルリヒがひそかに旗を巻いて国王の陣営から対抗王の陣営に寝返り、国王側の敗北をもたらしたこと³⁰⁾、一方でロイトリンゲンが国王に対する忠誠を守り、法王によって対抗王に選ばれた「坊主王」に抗して包囲に堪えたことも、語り手にとっては600年前の歴史的出来事ではなく、いまだに「血を沸き立たせる」事件であり、壮麗なマリア教会はこの歴史の生き証人であり、「市民意識の現れ」³¹⁾なのである。

したがって少年時代の作家には帝国都市対領

邦君主という対立軸しか念頭になく、価値判断はもっぱらこの視点から行われた。同郷のシュヴァーベン詩人シラーやウーラントも、帝国都市の敵対者たるヴェルテンベルクを讃える限り、許しがたかったのである。

「市がそれに続く時代に他の都市と同盟を結びながら『地方領主』と戦った歴史を、私たちは心底市に肩入れしながら辿った。私たちはシラーを心から敬愛していたが、詩人がヴェルテンベルクの党派精神に引きずられ、私たちの心に『憎しみを沸き立たせた』ことはどうしても我慢できなかった。」(S.59)

同様にシュヴァーベン都市同盟軍がヴェルテンベルク伯に敗北を喫した1388年のデッフィングンの戦いも「肩をすばめてやり過ごすのみであった」と述懐する。

市民としての誇りと貴族に対する軽侮は実際ヘルマン・クルツの心に深く根を下ろしていたようである。イゾルデ・クルツは娘の頃に父と交わした会話を次のように回想している。

「私は父の『一族の小説集』を読む前はこれらの名誉あるロイトリンゲンの鐘鋳造職人や消火ポンプ職人を大して偉いと思っていなかった。子供特有の率直さである日父に言った。『うちのママが同じ身分の人と結婚しなかったのはほんとうに残念だわ。そうなれば私も今ごろ貴族だったのに。』父は笑みを浮かべつつもいくぶん声を強めて答えた。『おまえ、それは思い違いというものだよ。盗賊

³⁰⁾ Vgl. Wilfried Setzer, Die Staufer und das Herzogtum Schwaben. / Dieter Stievermann, Entstehung der Territorien – politische Zersplitterung im deutschen Südwesten. In: R.Rinker und W.Setzer, a.a.O., S.72f. und 79.

³¹⁾ O.Borst, Reichsstädte. a.a.O., S.143

騎士として堅固な城塞を住处とし、罪のない旅行者に略奪を働いた母方の先祖を偉いと思うなんて。けれどお前の父方の先祖はまったく別種の人々だった。小さな共和国の現職市長や参事会員を勤め、生か死か、戦争か平和かという大事な決定を預かったのだよ。』³²⁾

小説の語り手同様、先祖が一翼を担った共和国の独立に対する強烈な自負も読み取れる。「私たちフランクフルトの^{バトリーツィアー}上層階級はいつも貴族と同等と思っていた」³³⁾ とのゲーテの言葉も思い起こされるが、クルツの場合は職人階級の市民の誇りである点が異なる。

小説全体のライトモチーフとなる宗派の対立についても、語り手はいち早く新教に改宗した帝国都市の歴史を誇らかに回顧する。

「さて、もう一つ私たちの都市の愛国心—この言葉をこのように縮小的に使って良ければであるが—を育む糧となったのは、再び祖先が敢然と歴史の表舞台に割り込んだ16世紀である。残念ながらもはや帝国の歴史というよりは、むしろその分裂の歴史に手を貸したのであるが。」(S.59)

これに続けて、ロイトリンゲンでは「ルターの登場よりも二三年早く改革が始まった」と述べ、「市は揺るぎない確信をもって新教を奉じ、プロテスタントの同盟にあくまでも忠実であっ

たため、シュマルカルデン戦争後は皇帝の懲罰リストに名前が載った」というエピソードを紹介している。ちなみにロイトリンゲンは戦後20,000グルデンの罰金を皇帝に納めねばならなかった。³⁴⁾

年代記的回顧は、続く17世紀の三十年戦争による新教旧教両軍の度重なる侵攻と徴発に触れ、市に衰退をもたらした戦乱の世紀を次のようにまとめる。

「戦争の災厄から抜け出したときには市は疲弊しきっていた。このような状態にあって、ルイ14世が帝国にもたらしたさらなる災難³⁵⁾を市がどうして堪え抜くことができたのか、理解しがたいほどである。にもかかわらず、ネルトリンゲンの戦い後の市の運命は、隣邦に比べれば穏やかなものであった。」(S.60)

さてここに至り市の年代記はようやく語り手の家族の年代記と交わる。

「三十年戦争の時代の直接の記憶は、祖父が固く守っていた家族の習慣に保持された。祖父は聖ペテロとパウロの日〔6月29日〕に断食をする慣わしであった。高齢になるまで祖父はこの日は何も口にしなかった。夜になってようやく乾いたパンを一口食べ、ワインを一口飲むと床についた。この断食日は、あの果てしない戦乱の、あまり名誉あるとは言え

³²⁾ I.Kurz, a.a.O., S.15

³³⁾ エッカーマン『ゲーテとの対話』(下) 167頁。訳は一部改変。

³⁴⁾ Württembergisches Städtebuch. S.413

³⁵⁾ 1688年から89年にルイ14世の軍隊がプファルツの継承権を主張して神聖ローマ帝国領内に侵入し、ハイデルベルク、マンハイム、ヴォルムス、トリヤー、ヒルザウなどの都市をはじめとする南西ドイツ一帯を破壊したことを指す。17世紀から18世紀の戦乱でロイトリンゲンが被った損失は総額でおよそ200万グルデンに及ぶ。(Württembergisches Städtebuch. S.413)

ないエピソードを成す『さくらんぼ戦争』の最中に市が幸いにも救われたことを記念するものであった。皇帝軍の将軍はすでに市門に迫り、ラッパ手は市に対して無条件の降伏を促していた。後に大佐でホーエントヴィール城の指揮官となるヴィーダーホルト少佐は手薄な自軍とともにすでに退却しており、最悪の事態はすぐそこまで来ていた。だが危ういところで市の法律顧問は、略奪、殺人、放火および恐ろしい改宗の危機から市民を救う降伏条件を皇帝軍から勝ち得ることができた。この日の記憶は、それよりも大きな幸いや災いを押しのけ、ほぼ200年もの長きにわたって生き続けたのである。

祖父は二度目の断食日をさらに宿命的な意味を持つ日の思い出に捧げた。祖父の部屋には古めかしいストーブがあり、その前面のプレートには、高々と炎をあげて炎上し、逃げ惑う人々でごった返す私たちの市の姿が鋳型に彫られていた。その上には『汝の罪、汝の火災』との文字が浮かんでいた。文字は硬く翻り、炎は重く立ちのぼっていた。しかし生身の人間による伝承は1726年9月23日という災厄の日付にそれだけ一層新鮮に絡み付いていた。市がああ炎の餌食になった日であった。よく祖父はその恐ろしい火災のことを話してくれたが、その思い出は私たちにとって愉快な一族の伝説とも結びついていた。それは祖父が父親から直接聞いたものだった。曾祖父は火災当時9歳で、混乱の瞬間に他の子供6人とともに大きな衣装箱に閉じ込められ、市

外に運び出されたという。丸一日衣装箱は子どもたちの絶望の叫びを發しながら、小高い丘の上に置き捨てられていた。幸い、古めかしく巨大な箱には空気の通る穴があった。あの恐怖の日々に行方不明となり、ようやく後になって見つかったか二度と見つからなかった他の子供たちに比べれば、まだしも恵まれていた方であろう。」(S.61-62)

1737年生まれ祖父にはこの二つの出来事についての直接の記憶はない。しかし、曾祖父の口から語られた帝国都市の決定的危機は、以後その息子を含めた家族の儀式的形で記憶に刻まれ、自戒の日として後の世代に伝えられることになる。実際、1813年生まれの語り手（作者）が祖父の習慣を目にしたのは1820年前後であろう。すでに18世紀には市壁や市門に市民が詰め、防衛に当たった時代は過去のものとなっていた筈であるが、この箇所からは都市の独立が終焉を迎えた後も、依然独立した「共和国」の意識を失わない帝国都市市民のメンタリティーが如実に伝わってくる。³⁶⁾

さて、このように年代記の部分を歴史的資料として読んで行くと、かつての帝国都市と先祖に対する誇りと郷愁を抱きながらも、作家は歴史的対象との間に一定の距離を置いていることが分かる。作家は語り手を登場させ、帝国都市の讃美が家族の思い出と結びついていることを冷静に分析させている。距離感はこの語り手を含めた小説全体の入れ子構成（二重の枠物語）によって読者にもたらされる。語られる時間

³⁶⁾ Klaus Grafは、過去の敗北や勝利、陥落や奇襲を記念する恒例の儀式が多く都市（北ドイツのItzehoeから南端のKonstanzまでおよそ60を数えている）で近代まで行われていたことを指摘し、これを „(adelige und) bürgerliche Erinnerungskultur“ と呼んでいる。(Klaus Graf, Der adel dem purger treget haß. Feindbilder und Konflikte zwischen städtischen Bürgertum und landsässigen Adel im späten Mittelalter. 1998 および Schlachtgedanken im Spätmittelalter. Riten und Medien der Präsentation kollektiver Identität. 1997 (<http://www.uni-koblenz.de/~graf>))

(erzählte Zeit) を成す祖父—曾祖父母—高祖父母という家族系図、および時代を超えた鐘の伝説という、めくるめくような過去に遡る時間系列の存在に加え、「最初期の記憶とともにかつての帝国に生きている」と自らを語る語り手は、若い聞き手の存在と語りの時点の時間(Erzählzeit)という現代に向う時間系列の存在をも読者に意識させる。19世紀後半に育った娘イゾルデは「私が自分の眼で見たロイトリンゲンはそれ[父の作品の世界]とはまったく異なっており、両者をひとつのイメージに合致させることは私にはついぞできなかった。」³⁷⁾と回想するが、この物語の構造はこの若い世代の視点まで内包していると読者には感じられるのである。

このように考えれば、ここで行われているロイトリンゲンの描写は理想化Idealisierungではなく、むしろ文学という形を通した美化Verklärungと見るべきであろう。結末に語り手が再登場し、手短に年代記への関連付けを行って幕を閉じるという構成も、それまでの物語の比重が大きいくだけに、年代記の枠を完結させるに至らず、全体の物語的印象を強めているのである。

IV 文学化された「故郷」

かつては同郷の詩人メーリケの良き友人であり、理解者であったクルツであるが、隠棲する「オルプリートの王」とは対照的に、三月革命の前後から急速に政治的・社会的な傾向を強めて行く。³⁸⁾ 8年間のシュトゥットガルトでの作

家活動の後、1844年秋にカールスルーエに移り、『教化と娯楽のためのドイツの家庭の本』Deutsches Familienbuch zur Belehrung und Unterhaltungの編集者となると、封建的反動に対する進歩派市民の戦いの渦中に巻き込まれる。クルツは同僚の政治的詩人プファウLudwig Pfauの仲介でリベラル左派のグループを知り、民主的社会変革の積極的な唱道者になる。1848年2月にフランスから革命の波がヴェルテンベルクに達すると、エスリンゲンに滞在していたクルツは長編『太陽亭主人』Der Sonnenwirtの筆を擱き、ただちに革命の勃発したシュトゥットガルトに向かい、民主運動に身を投じる。4月からはシュトゥットガルトの反政府系の民主主義的新聞『監視者』Beobachterの編集人となり、1849年7月に編集長のヴァイサーAdolf Weißerがスイスに逃れた後は、1854年まで後任を引き受け、論説や文芸欄など紙面のほとんどに健筆を揮った。1851年には出版法違反の嫌で、かつてC.D.シューバルトが監禁されたホーエンアスペルグに数週間投獄された。1853年の再逮捕の際は弁護士の雄弁のお蔭で辛うじて放免されたという。また、1848年に「どんな弁髪も切り落とす必要がある」³⁹⁾と告げて、先祖代々の表記KurtzをKurzに変更したというエピソードにも、単なる過去への郷愁に陥らない作家の時代的・社会的な批判精神のあり方が窺えよう。

1850年代に民主主義勢力がプロイセン主導のドイツを目指すか、オーストリアを含めた大ドイツを志向するかという意見の相違から分裂すると、後者を主張するクルツは『監視者』紙の

³⁷⁾ I.Kurz, a.a.O., S.14

³⁸⁾ イゾルデは二人の作家の相違について、「メーリケの文学が夢の生活から生まれるのに対して、クルツの文学は永遠的典型的真実を照らし出す実生活に根ざしている」と説明する。作家自身も自らの傾向について、「メルヒェンの森からいつでも即座に実生活へと立ち戻る街道を拓く」と述べたという。(I.Kurz, a.a.O., S.102)

³⁹⁾ Vgl.I. Kurz, a.a.O., S.16およびS.123

編集から退く。クルツの考えは、特別の議会を持つ小領邦同盟がプロイセンおよびオーストリアと庇護独立同盟を結ぶという三極構造から成る大ドイツであったという。プロイセン、オーストリアという強国に、南ドイツの小領邦間の同盟を第三極として対置させたところに、シュヴァーベン⁴⁰⁾の帝国都市に生まれ育った作家の真骨頂があったのかもしれない。

もちろんクルツの理想は日の目を見なかった。昔日の帝国都市の共和国はすでに遠く、新たな祖国はいまだ視界に入らない。「私は時代の狭間に生まれ落ちた」⁴¹⁾ との後年の述懐には、あくまでも現実の政治・社会に立脚した作家の苦渋が感じられる。このような時代に成立した『帝国都市の鐘職人一家』が、単なる懐旧にも陥らず、未来に向けた帝国都市の理想化にも向かわなかったのはむしろ至極当然かもしれない。

かつてクラウディオ・マグリスは「ハプスブルク神話は帝国崩壊によってはじめて最もその効果を発揮できる、興味深い段階に突入した」⁴²⁾ と指摘した。帝国都市の神話化にも総じて同じプロセスが認められよう。⁴³⁾ ヘルマン・クルツの場合、家族の思い出と分かちがたく結びついた帝国都市は、冷静な時代精神と社会批評眼というフィルターを経て、小説の世界で一

つの像を結んだ。ただし、それは現実から切り離された完結性において、他の文学作品—たとえばアイヒェンドルファーでも描かれた、どこにもない「故郷」という数多くの牧歌^{イデュール}のうちの一つと見るべきであろう。

あの夕映えの中に
私を生んだ町がある
谷から響くのは
明るく澄んだ鐘の音
ああ私の青春の音
お前たちはまた甦る！
目には涙が揺らぎ
心の琴線はお前たちに合わせて震える

[…]

今こうして帰郷して
心は不安におののくばかり
ようこそと迎える人はなく
厳かなお前たちの響きだけ
ああ私の青春の音
お前たちはまた甦る！
目には涙が揺らぎ
心の琴線はお前たちに合わせて震える⁴⁴⁾

⁴⁰⁾ Gerhard Fischerはヴェルテンベルクとの緊張関係の中で維持されてきた帝国都市ロイトリンゲンの共和制を最大限に評価し、「このような歴史的状況がこの小都市の住民の反抗的・防衛的市民意識を形作り、反封建的、反絶対主義的要素を付与することになった」と述べ、作家の「革命的・民主的姿勢」の源を生まれ育った帝国都市の状況に求めている。(Gerhard Fischer, a.a.O., S.361f.) しかしこの点に関してはさらに綿密な考察が必要であろう。

⁴¹⁾ I. Kurz, a.a.O., S.5

⁴²⁾ クラウディオ・マグリス『オーストリア文学とハプスブルク神話』書肆風の薔薇(1990年) 341頁

⁴³⁾ たとえばW.ツォルンはアウクスブルクについて、1806年に帝国直属が廃止された後も帝国都市の意識がいかに市民(都市貴族であるか一介の職人であるかを問わず)の性格に深く刻まれていたかを述べた上で、次のようにまとめている。「帝国都市の終焉から時間的に隔たるにつれ、かつての偉大さと豊かさはいっそう麗しい光をまとい、帝国都市の過去を受け継いだ市民の誇りはいっそう際立った形で現れたのである。」(Wolfgang Zorn, Augsburg. Geschichte einer deutschen Stadt, H.Mühlberger, 1972. S.242)

⁴⁴⁾ 『父祖の町の鐘』Die Glocken der Vaterstadtより。(In: H.K., Sämtliche Werke in zwölf Bänden. Hrsg.v. Hermann Fischer. 1.Band. Max Hesse. Um 1900, S.16f.)